

この一〇月に、名古屋市で生物多様性条約第一〇回締約国会議、通称COP10が開催される。その最大の争点はバイオパイラシーになりそうである。馴染みのない言葉であるが、パイラシーは海賊行為から派生して、権利侵害とか、特許侵害という意味で使用される。したがって、バイオパイラシーは生物資源の権利侵害となり、生物資源を人間が利用するときの権利関係についての議論である。

二〇世紀初頭に合成ゴムが発明されるまで、天然ゴムは自動車用タイヤや消防ホースの生産などにとつて必須の資源であった。産地はブラジルのアマゾン流域で、雨季に河川の増水で水没する川沿いに自生するパラゴムノキの樹液が原料である。一九世紀には、イギリスやベルギーの会社が先住民を酷使して現地で採集していたが、増大する需要に対応するため、ブラジル国外での栽培が検討されるようになった。

しかし、パラゴムノキはブラジルの重要な産業資源として国外への搬出は禁止され、アマゾンから外洋へ出港する河口の港町パラで検閲が実施されていた。何度かの密輸の失敗があったが、ある人物が「イギリス女王陛下の所有する王立キューガーデンに輸送する植物標本」という名目で搬出に成功し、ロンドンで温室栽培された苗木がセイロンなどに移植され、ブラジルの優位は消滅した。まさにバイオパイラシーの典型である。

一七世紀から一八世紀にかけてのヨーロッパに、プラントハンターといわれる人々が登場する。当初は熱帯地方から物珍しい園芸植物を収集することを仕事としていたが、産業革命の進展とともに、パラゴムノキに代表される産業資源としての植物や、キナノキが有名であるが、薬品を抽出するための植物を収集する仕事へと発展していき、有用な植物を採集する職業としてのプラントハンターが次々と登場してくる時代となる。

合成化学が発達した現代は必要な物質を自在に合成でき、天然素材は不要のようであるが、そうではない。昨年のインフルエンザ騒動で有名になった薬品タミフルは中華料理の香料である「八角」の成分を抽出した素材を原料としている。マダガスカル原産の「ニチニチソウ」に含有されるアルカロイドは細胞分裂を阻害する作用があり、ガンの治療に利用されている。このように生物資源に依存した薬品は現代でも多数ある。

このような有用な植物の宝庫はアフリカやアンデスの国々に分布しているので、現代でもプラントハンターという職業は重要であるが、問題は、それらの国々が権利に目覚めてきたことである。一例としてアンデス原産のカムカムを原料とした飲料が人気になりつつあるが、ペルー政府は国際貿易機関（WTO）の会議で、その飲料について外国の企業が特許を申請することはバイオパイラシーに該当すると警告している。

ペルーには約二万種の植物が自生しており、その二七％強はペルー固有で、現状でも六〇〇種以上が食用、千種以上が薬用に利用されている。当然、まだ利用されていない植物もあるし、研究によって新規の薬効などが発見される期待もある。そのような未知の財宝を現代まで維持してきたのは発展途上諸国であり、それを自国や自社の利益のために勝手に利用するのは海賊行為だというのが、それらの国々の論理である。

生物多様性条約第一条の目的には「遺伝資源の利用から発生する利益の公正かつ衡平な配分」という言葉がある。この利益配分の方法が会議の争点となるが、それは単純に新種の南北問題としての議論ではなく、絶滅速度が増大している生物の持続可能な利用を実現する議論にしなければ、一時の利益で国家や企業が繁栄しても、人類の食料や薬剤の貴重な資産を喪失することになりかねない。